

週間ダイヤモンド 今週の一冊

北村行伸

平成10年10月24日号

「学者人生のモデル」

ハーバート・A・サイモン(著)

安西祐一郎・安西徳子(訳)

岩波書店 1998年1月28日刊

20世紀に幕を引くにあたって、この激動の一世紀をいかに生きてきたかを書きしるしておきたいという願望が、著名人のみならず一般人にまで広がっている。いわゆる自分史ブームである。歴史に名を残した人ならば、後世の歴史家や小説家はその人の伝記を書くこともあるだろうが、無名の人にとっては、その人が亡くなれば記録としては何も残らないのが普通である。また、たとえ比較的多くの資料を残すような著名人であっても、本人でなければ知り得ない情報すべてが残されているわけではないことを考えると、有名・無名を問わず、本人が自分史を書き残すことの意義は大きい。

本書は1978年にノーベル経済学賞を受賞したハーバート・A・サイモンの自分史である。サイモンは政治学からスタートし、都市計画、経営学、組織論、経済学、実験心理学、コンピュータ科学、認知科学に及ぶ広大な学問領域で画期的な業績を挙げてきた今世紀最も偉大な学者の一人であるが、本書では、人生の岐路の中でいかに新しい研究フロンティアに接し、次々と研究分野を広げていったのかが実に興味深くかつ誠実に語られている。

サイモンの研究は、1960年代以後経済学を離れていたこともあり、経済学者の間で取り上げられることは少なかったが、この10年ぐらゐ彼の研究が再評価されている。彼はゲーム理論の進展の中で見直されてきた限定合理性の概念の提唱者であり、ポール・クルーグマン(MIT)が複雑系の経済学を考えた時に先駆的業績として取り上げたのが、ジップ法則に基づく都市規模とその数(頻度)の関係であるが、これもサイモンが初めて明らかにした現象である。

とはいえ、本書を紹介したのはサイモンという偉大な学者の人生やその業績を知ってもらいたいというより、むしろもっと広い意味で、この不確実な時代に、人生のあり方を考える上で、非常に参考になると思ったからである。

サイモンが提示した限定合理性という考え方は、あらゆる可能性を考慮した上で、意思決定をするというグローバルな合理性の理論(最適化理論)ではなく、複雑さに直面したときに人間が示す限定された推論能力の理論(満足化理論)に従っているということだが、サイモンは自分の人生を振り返ってみると、この満足化理論が良く当てはまるかということを実感し、次のように書いている。「人生は、自分の行く道に沿って驚きを経験し、別の道を行ったらどうなっていたらと思うながら、(あまり深刻にならずに)迷路のある庭や城の中を進むことにある。…生きることは探索であり、それ以上の要約は不必要なのである。」

サイモンにとって受け入れ難い最適化理論に基づけば、すべての人生には最適経路があり、それを上手くたどった人が人生の成功者で、たどり損なった人が失敗者とな

るが、人々は合理的なので、ほとんどの人が最適経路をたどるはずであるということになる。しかし、激動の時代では、人生の最適経路をたどるには、あまりにも不確実な要素が高く、その時々でなんとかつじつまを合わせ、それなりに満足してきたというのが、多くの人にとっての実感ではないだろうか。

今、サイモンの研究が再評価されているのは、彼の発想や手法が先進的すぎて、我々がやっとその真意を理解できるようになったということもあるが、彼の議論の中に否定しがたい真実が含まれているがゆえに、時代の変化と共に再び認識されてきたということでもあろう。

すぐに役立つ実践書に含まれている情報はすぐに役立たなくなる情報でもあるが、本書が伝えているメッセージは、各人が人生を通して確認すべき問題である。秋の読書シーズンにうってつけの一冊である。特に、自分史を書きたいと思っている方には、一読を強くお勧めする。